

私にも
言わせて!
第115回

外科から総合診療、
地域医療を経て行政へ

「院長になって地域医療を満喫していたのに、(新型コロナウイルス流行中の)こんなタイミングで保健所に行こうなんて」と、周囲や家族から驚かれたり、あきれられたりしました。確かに新型コロナウイルスがなかったら、行政に入ろうと考えることもなかったでしょう。紆余曲折の医者人生ですが、ご一読いただければ幸いです。

外科医時代

平成9年、整形外科志望を公言していたものの、卒業式後の謝恩会で外科の名物教授のモノマネを演じたことが医局長にばれてしまい、そのことから外科に入局することになりました。呼吸器外科・心臓血管外科・消化器外科で修練を開始。大分県内の病院をローテートしつつ濃密な日々を過ごしました。さまざまな合併症と周術期の管理を行いながら手術に取り組み、救急症例にも日々対応していました。

外科専門医を取得した後、15年

た「後日、「医師不足だった病院が、県内で3番目に訓練ができる」と(県庁含めて)思われてなかった」と分かりました。

数年がたち、赤字だった病院は黒字転換しましたが、自身は再び腰痛・左下肢痛が悪化。3度目の手術を受けた後、病院を退職。24年、阿蘇・くじゅう国立公園の麓にある、有床診療所に赴任することになりました。

地域医療を満喫

毎日、診療所周辺に多数ある炭酸温泉(血管拡張作用あり)に浸かり、痛みとしびれが改善しました。自然豊かな環境のおかげか、おおよそ患者さん(兼飲み仲間)が多く、山菜やジビエ料理なども頻繁にごちそうになりました。「風に立つライオン」さだまさし作詞・曲)の歌の医師のように、日常診療をしながら自身が癒やされていくのを感じました。熊本地震の際は近所の神社の鳥居が崩れたり、危うく宿舎の本棚の下敷きになりかけたり、という怖い経験もしましたが、在宅医療や医科歯科連携にも取り組み、地域医療の面白さ

より愛知県がんセンター研究所で学ぶ機会をいただきました。高橋隆先生(現在同センター総長)のご指導の下、マイクロRNAの集団であるmiR-17-192クラスターが肺がんで過剰発現していること、肺がん細胞の増殖に関与することを見いだし、Cancer Researchに報告することができました。がん研究を続けることも魅力的でしたが、「早く手術を再開したい」という思いが勝り大分県に戻りました。

博士号を取得し、順調に呼吸器外科医としての経験を積んでいたところ、腰痛と左脚にまひが生じました。腰部脊柱管狭窄症・椎間

を堪能していました。

平穏に医者人生を終えようといメージしていたところに、COVID-19が発生しました。結核対策にN-95マスクや防護服などがストックしてあったので、すぐにスタッフと着脱訓練を行い、動線を確保して発熱外来を始めました。住民教育がてら防護服姿を披露していましたが、近隣で陽性患者が発生すると、田舎町もパニックに陥りました。数か月がたち発熱外来もスムーズに運営できるようになったところ、保健所の疲弊とマンパワー不足を知るようになりました。

知らないふりをしていた方が、幸せだったかもしれません。しかし「医療人として、自分に貢献できることはないのか?」と考えるようになりました。本棚から引き込まれるように手に取った『陽だまりの樹』(手塚治虫が自分の曾祖父の蘭方医を題材にした作品)を読んだことで、そんな思いがさらに強くなりました。10年前に読んだ時は、腑分け(解剖)の場面くらいしか印象に残りませんでした。この時はコレラの流行や種痘所設

板ヘルニアを発症し、自分が手術を受ける羽目になりました。術後すぐに仕事復帰するつもりでしたが、まひが改善しないまま大腿四頭筋の萎縮が始まり、再手術となりました。側彎症も合併しており、外科医を続けるためには胸椎から腰椎まで固定する必要があります。た。「サイボーグ外科医としての再出発も悪くないか」と自嘲していましたが、将来の不安には勝てませんでした。胸腰椎固定術は回避しましたが、大学医局からも離れることになりました。

外科的総合診療医として

先輩たちが誘ってくれましたので、コルセットを巻いて外来診療バイトを始めました。半年ほどバイト生活をしましたが、がんセンター帰りに勤務した縁もあり、医師不足で全国的にも有名になっていた竹田医師会病院に就職しまし

立のこと、公的機関への仕官などのエピソードの数々が、自分を公衆衛生の世界へ導いているような感覚を覚えました。

そして行政へ

令和2年晩秋に妻(産婦人科医)に相談し、県福祉保健部に面談を申し込みました。バタバタと書類作成を行い、オンライン試験・面接などを乗り越えて、翌年度の保健医療科学院の研修受講と県庁入りが内定しました(が、肝心の診療所院長の交代契約がまとまらなかったのは翌年3月中旬で、実際かなり焦りました)。

3年4月に行政に入り、すぐに埼玉県和光市にある科学院へ向かい研修を受講。緊急事態宣言の間をすり抜けて和光市と大分県を行き来しました。オンライン研修・集合研修も、同期生仲間に助けられながら脱落を免れ、無事に修了できました。7月途中から県庁感染症対策課に勤務することになりましたが、初日にデルタ株が県内で発生。そのまま第5波にのみ込まれました。入院調整業務に追われた結果、



大分県南部保健所
副所長

林下 (はやした) 陽二

長崎県出身。平成9年大分医科大学卒業、同大学外科学第二入局。15年愛知県がんセンター研究所分子腫瘍学部(リサーチレジデント)、20年竹田医師会病院(総合診療科長)、24年久住加藤医院院長を経て、令和3年4月大分県入庁、7月感染症対策課課長補佐。4年4月より現職。医学博士。日本外科学会認定登録医。

た。外科専門医だったのに準備された名札が「内科」だったので、就職直後から医師会会長・事務長と激しく議論する羽目になりました。

しかし「元外科」とは表示できないので、苦肉の策として当時まだ十分普及していなかった「総合診療科」と名乗ることにしました。高齢者の診療は、経験上わりと得意でした。また田舎の病院に外傷は付き物で、縫合などの処置は喜々として行っていたので、これを「外科的総合診療科」と名付けて実習にやってくる学生さんに紹介していました。

そんな中、平成21年に新型コロナウイルスエンザが流行しました。院内で感染対策チームを率いていたため、当時の保健所長らにそのかされながら1人でシナリオ作成ほかの準備を行い、発熱外来訓練を実施しました。思えばこれが行政とのファーストコンタクトでし

不整脈による動悸と胸部不快感・不眠・頸肩痛に持病の腰痛も悪化させ、8月半ばにダウンしてしまいました。緊急検査、内服薬を追加してもらって業務復帰。ポロポロになりつつ秋になり、第5波は収束を迎えました。気が付けば、課長と2人で600人超の入院調整を行っていました。生活環境を整えて、心身の回復を自覚し始めた時にはクリスマスになっていました。

おわりに

まだ第6波以降(オミクロン株)の流行が収まりません。私も弱体化しましたが、コロナウイルスも弱毒化してくれました。一日も早く、COVID-19が通常風邪症候群の原因ウイルスの一つとして扱われるようになること、そして2年以上も闘い続けてきた保健所の負担が軽くなることを祈っています。